(5) 小麦畑のアブラムシ－田舎の小さな博物館－

同じ植物を大面積で作りますと、やがてそれ特有の病気やらムシ達が目立ってきます。それも当然で、それぞれの植物には固有の生物が依存し続けてきたのですから…。小麦も例外ではなく、葉や穂などの養分を頼りにいろいろなムシが暮らしていて、それを食べる天敵達*もやってきます。ここで、ムシの眼で秋まき小麦畑の風景を眺めてみましょう。

秋に播かれた麦は、10cm長・数枚の葉で冬を迎えます。そんな小さな麦にも、葉身の半分以上が白っぽく色ヌケした下葉が見られます。袋状になった葉を開いてみますと、葉肉を食べている白い蛆（ムギクロハモグリバエ）が1匹ずつ入ってます。大急ぎで生長して、早く地中に潜って蛹になりませんと、凍死してしまうのです。

春になって雪と凍った土が解けますと、麦が緑を増してきます。株の中には中心部に巻いた葉だけが黄色いのがあり、その葉をつまんでひっ張ると簡単に抜けてきます。これは葉の基部が、病原菌（スッポヌケ病）や蛆（ムギキモグリバエ）によって損傷しているためで、この株はもうダメで生長しません。麦畑の縁を歩きますと、小さな褐色のムシがふわっと飛び移るのに気がつきます。セミをずっと小型にしたような、ヨコバイの一種です。また、麦が伸び始めますと、細長くて七宝焼きの光沢をもつ濃青色の甲虫（ムギクビボソハムシ）が歩き回り、葉表に長い掻き傷をつけ、楕円の卵を数粒ずつ産みつけます。

6月になると穂が出始めますが、そのあたりから、小麦畑は賑やかになってきます。というのは、いよいよ栄養たっぷりの子実を作る時期になるからです。養分の稼ぎ頭である上2枚の葉には、真っ黒で艶のあるムギクロハモグリバエが、お尻の産卵管で傷をつけて汁をなめたり、葉肉に卵を産みこんでいます。葉表には濡れた大小の泥粒が付着し、その付近は葉面が舐めとられて半透明になっています。泥粒のように見えるのは、ムギクビボソハムシの幼虫が糞を被っているためで、この目くらましで天敵から逃れているのです。葉裏には白っぽいムギウスイロアブラムシの母娘が集まって汁を吸っています。

小麦の花が咲き終わるころから、穂のすき間には、茶色や緑色で少し細長いムギヒゲナガアブラムシがつき始めます。穂首や葉の基部にも、前半分は暗青色、お尻のあたりが暗赤色で丸みのあるムギクビレアブラムシもいます。これらは、麦粒に転流していく養分を、ストロー型の口で吸汁するために、母娘の集団が待ち受けています（ほとんどのアブラムシは、なぜか夏の間は雄がいません）。このぷりぷりのジューシィなアブラムシを狙(ねら)って、天敵のテントウムシやクサカゲロウの成虫が徘徊しています。

クサカゲロウというのはトンボに近い虫で、「ウドンゲの華(はな)」とも呼ばれる長柄の卵を産みつけ、淡緑色でひらひらと弱々しく飛びます。でも、幼虫は灰色で「アブラムシのライオン」と呼ばれるほどいかつくて怖い存在で、成虫とともにアブラムシを捕食します。道東の小麦畑にわけ入りますと、この淡緑色がいっせいにふわーっと舞い上がるほど沢山いますが、アブラムシはちゃんと生き残っています。

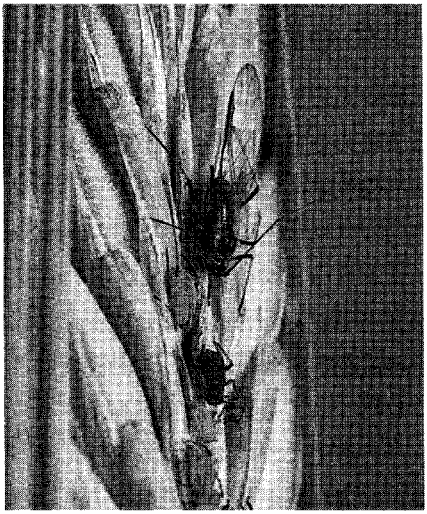
ほかの天敵としては、幼虫がアブラムシの体内を食べつくし、その中で繭(まゆ)造(つく)りするため、アブラムシの膨らんだミイラを作るアブラコバチや、のたーっとしたウジのハナアブ類、早歩きで黒っぽいテントウムシ幼虫なども見つかります。幼虫が根粒菌を食べるといわれるミスジヒメヒロクチバエも、どういう訳でしょうか、よく遊びに来ています。このムシは日当たりのいい葉の上に止まって、所在なげに3本線の羽を上下にゆっくり動かし、黒く艶のあるハエです。

麦畑が黄色くなり、ムシの数が寂しくなって、晴天の日には「パリッ…パリッ」と麦稈・穂がはじけるようになりますと、まもなく収穫期です。

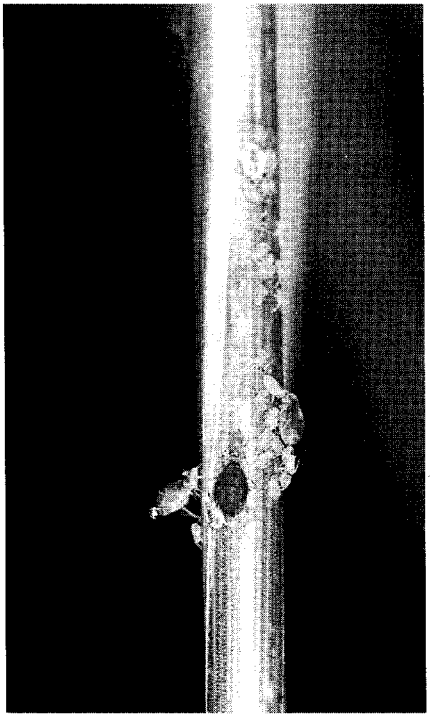
どうです？　ルーペ片手に小さな博物館をゆっくり眺めてみる気になりましたか？

天敵達*：自然界には捕食者、寄生者として、あるいは病原微生物として、害虫の死亡要因として働くものがおり、それらを天敵といいます。アブラムシを食べるテントウムシがおり、最近では人工増殖で、オンシツコナジラミに対する寄生蜂や、ハダニを捕食するチリカブリダニなどの利用が実用化されています。

＜烏倉　英徳＞



穂に寄生したアブラムシ



茎稈に寄生したアブラムシ

『小麦病害虫防除手引』北海道米麦改良協会編集より